

## みなみやまのばか婿のはなし

みなみやまのばか婿のはなし ①

むかしむかし、みなみ山にばか婿がいたんだとお。あるとき山の向うの部落の知りあいによばれて出かけていったんだとお。そこで石うすでひいた小麦だんごをよばれ、あんまりうまかつたのであごが外れそうになつて何杯もお代わりをしたんだとお。そこで家に帰ったら早速つくってもらおうべい。そう思つてその名前を忘れまいと帰り道にくり返しくり返し、だんご、だんごつぶやいてきたんだとお。ところが山道に堀があつて、それをどっこいとのっこえたとたんに、だんごという言葉を忘れてしまったんだとお。どう考えてもだんごの名前がでてこない。あげくのはてに口をついてでてきたのは、さっきのどっこい、どっこいだったとお。家にもどつてくるがはいか「いまきたぞお、おつかあ。どっこいどっこいという、うまいものをよばれてあごが外れそうだったぞお。おめいも作つてくれる。」とそのうまい味を話し、だだっこのように妻にせがんだとお。「馬鹿をいうもんでねえ、とつつああ。どこにどっこいなんてあるもんか。」とうとう夫婦けんかが始まり、ばか婿はほうきでたたいて妻の額に大きなこぶができたとお。それをみた妻はたまげたらんごのようなたんこぶができた。だんごのようなたんこぶができた。」といつてしりもちをついたんだとお。ばか婿はその声を聞いてやつとだんごを思いだし、「おつか、おつかあ。そのだんごだ。そのだんごだ。」と手をたたいてよろこんだとお。